

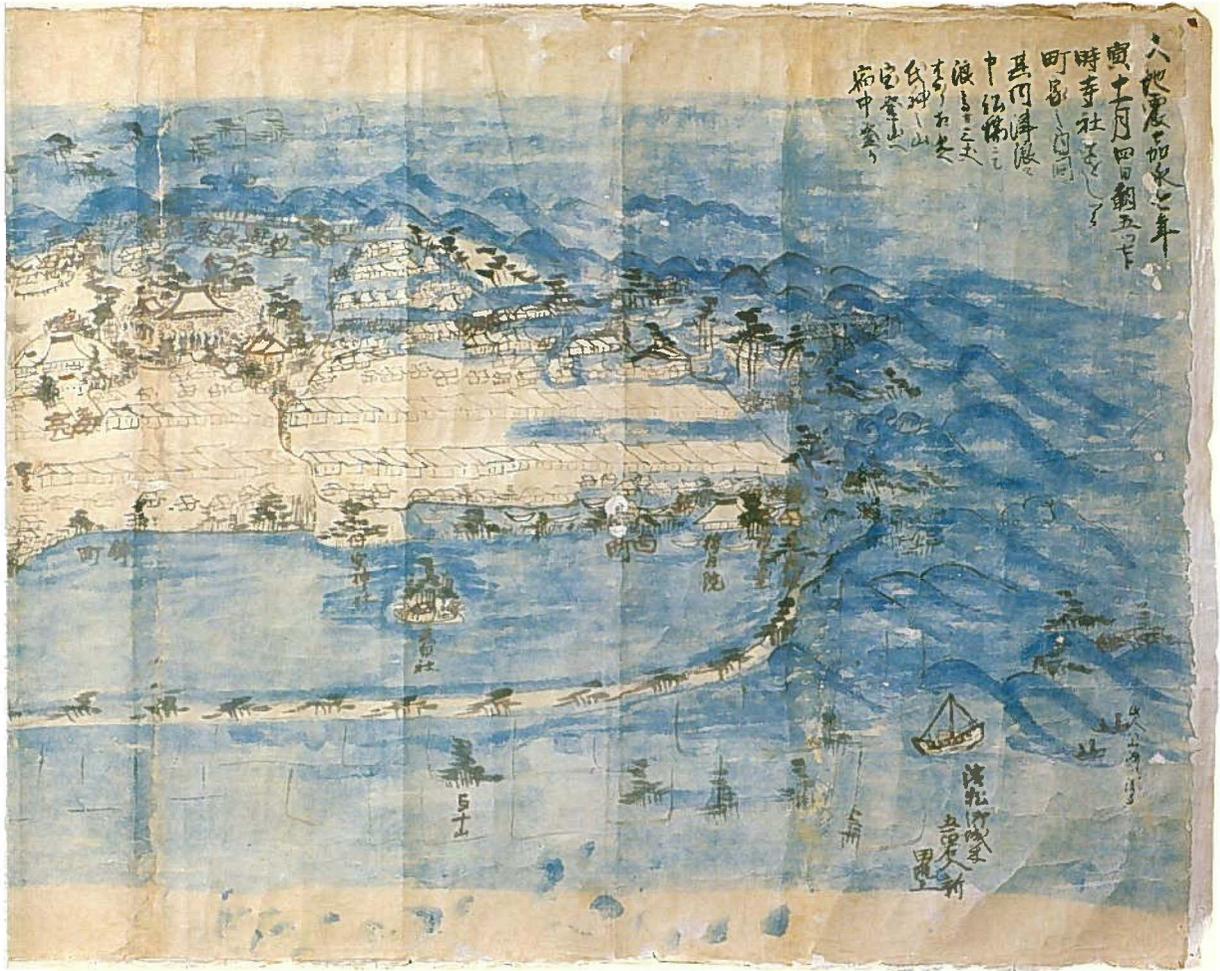
舞坂宿を襲った 安政地震津波

遠州灘の海底は大地震発生の常習地帯である。遠州灘と浜名湖との間に町並みを形成している舞坂町は、海拔2 m余りの平たん地。その歴史には、大地震、大津波のつめあとがくっきりと残っている。

遠州灘と浜名湖とを結ぶ今切口ができた明応の地震(1498年)、新居関所が壊れ、今切渡船も中断した宝永の地震(1707年)、舞坂宿の大半が浸水して家屋に大きな被害がでた安政の地震(1854)など。ひとたび遠州灘で大地震が発生すれば、沿岸の舞坂は津波の被害から免れることはできないのである。今また東海地震の発生が心配され、当地でも各種の対策を講じている。

関所の対岸に位置した舞坂は、小さいながらも東海道五十三次の宿駅であった。そのためか、文書などの古い記録も数多く残っている。津波災害に関するものも幾つかある。舞坂町西町の渡辺家に保存されているこの絵図もその一つ。当主から五代前の八郎平(1824年-1901年)が、30歳の時に体験した安政地震の津波被害状況を、タテ42cm、ヨコ104.5cmの和紙に描いたものである。

上(南)が遠州灘。右(西)と下(北)が浜名湖。東西に



貫く東海道に沿って家屋が300軒余り。海拔5m余りの岐佐神社と奉燈山に人々が逃げ登り、津波が収まるのをじっと待っている。何波も襲ってくる津波を不安げに見つめていたことであろう。なお、水が引いたあとの竹やぶには魚が引っかかっていたという言い伝えも残っている。

安政地震による被害の様様を書き留めた古文書を要約すると、舞坂宿の状況は次のとおりである。

「大地震に続いて高さ2丈余り（約6m、絵図には3丈とある）の津波が舞坂宿を襲ったので、海岸の石垣はひとたまりもなく崩れ落ちた。水の勢いは激しく、渡船場から上がったかと思うと、またたく間に南東の方向へ走り、家屋を打ち砕いた。東の方でも提防が切れ、全部の田畑に潮水が入った。宿場は一面、海のようになってしまった。浜名湖のノリソダも1本残らず流されてしまった。渡船場の付近は土地が低いので、角屋（旅籠屋、以下同じ）へはかまのいの上まで水がきた。向かいの正月屋は全壊した。湊屋、笹屋、桔梗屋はいずれも裏から水が入り、半壊した。掛塚屋と茗荷屋は家が新しく、土地も高いので、床まで水が入った

だけです。しかし、渡船場の石垣が崩壊したので渡船の航行に支障が出た。このほか、八丁堰の北の方からも水が入り、道路が押し流されて通行できなくなったため、回り道した」

舞坂宿から中泉代官所へ提出した報告書によると、家屋の被害状況は、流失8軒、全壊8軒、半壊58軒、破損214軒であった。

これほど大きな被害が出たにもかかわらず、犠牲者は一人も出なかったのである。堅固な防波堤があるわけではなく、もちろん、科学技術も情報網も発達していなかった時代のこと。町の地形が津波にまったく無防備だったので、「地震が起きれば、すぐ高い所へ避難する」というのは、津波危険地帯に住む人たちの生活の知恵であっただろう。

しかし、最近は堅固な防波堤や波消しブロックなどの整備が進んでいるためか、長年、被害が出ていないためか、津波に対する危険意識が薄れ、受け継がれてきた津波体験も、風化しようとしている。